

昭和の大修理前、大龍柱には、カスガイは幾つどこに嵌められていたのか



写真 A

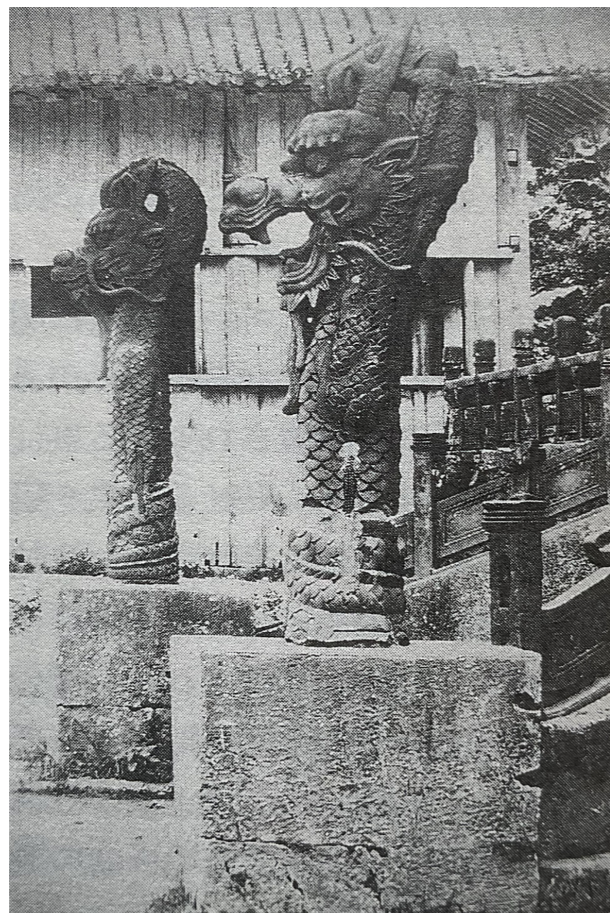


写真 B

写真 A,B とも鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』より



写真 C

写真 C は、坂本万七『沖縄・昭和 10 年代』より



写真 F

写真 F,G,H とも鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』より



写真 G 1924 年撮影



写真 H 1922 年撮影

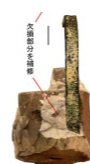


写真 D



写真 E

写真 D,E とも東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵「首里城正殿写真」より 1933 年 9 月 10 日撮影



遺物 Sa- 博 4

昭和の大修理で、首里城は沖縄神社拝殿になり、この時に大龍柱は、正面向きから相対向きに変えられた。それ以前、熊本鎮台沖縄分遣隊によってへし折られた大龍柱は、真ん中の部分を欠き短くされた状態で繋がれ、その繋ぎ目にはカスガイが用いられていた。このカスガイが、幾つ、どこに嵌められていたのかをここでは確認しておきたい。

吽形大龍柱においては、鎌倉芳太郎撮影の写真 A と B から、左右両側面にカスガイが存在し、正面にはカスガイは無いことが確認できる。また、写真 D (東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵「首里城正殿写真」) は、大龍柱が相対向きに変えられた直後の写真であり、吽形大龍柱の右側面の下にはトグロ巻部の背面が繋がり、そのトグロ巻部の背面にカスガイの穴と窪みの補修跡が確認できる。

阿形大龍柱においては、やはり鎌倉芳太郎撮影の写真 F と H によって、正面と左右両側面にカスガイが存在していたことが確認できる。また、坂本万七撮影の写真 C により、背面にはカスガイはなかったことが確認できる。坂本万七撮影の写真 C も大龍柱が相対向きに変えられた後の写真であり、阿形大龍柱の背面の下にはトグロ巻部の右側面が繋がっている。トグロ巻部の右側面にはカスガイ跡の上から石灰様のもので補修された様子が見られるが、背面部分にはカスガイの痕跡は無い。

つまり、吽形大龍柱にあつては、左右両側面と背面の三箇所に、阿形大龍柱にあつては、左右両側面と正面の三箇所にカスガイが嵌められていたということになる。

ちなみに、写真 H は 1922 年撮影、写真 G は 1924 年撮影で、この間に阿形大龍柱正面のカスガイが外されたことが分かる。

また、写真 E (東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵「首里城正殿写真」) では、阿形大龍柱の左側面にカスガイ跡の穴と窪みの補修が確認できるのだが、カスガイのついた状態で「遺物 Sa- 博 4」が遺っていることから、1933 年 9 月 10 日の撮影時以降にカスガイが嵌められたことが分かる。阿形大龍柱の左側面のカスガイ跡の穴や窪みは再度カスガイを嵌めるために利用され、トグロ巻部背面には元々カスガイは無かったので、新たに穴が穿たれたのではないかと考えられる。写真 F に見られるカスガイと「遺物 Sa- 博 4」のカスガイではその形状やテクスチャーが異なるようにも見えるので、この昭和の大修理の時に、新たに作られたカスガイが嵌められたのかもしれない。

(永津禎三)